



—世界に飛び出した「秋田人」—

チベット仏教に生涯をかけた多田等観

北条 常久

(あきた文学資料館 名誉館長)

多田等観はヒマラヤの深山を単身で越えて秘境チベットに入り、11年余その地でチベット仏教を学んだ。そして帰国時には数万巻の経典や古文書を日本に持ち帰り、日本の東洋学発展に大きく貢献し、自らもその研究に没頭し、その名は世界に知られる。彼は現在の秋田市土崎港中央3丁目7-2にある本願寺派弘誓山西船寺ぐぜいさんさいせんじに十四世住職多田義観ぎかん、タエの六男二女の三男として明治23年7月1日に誕生した。彼は、秋田中学に通い、明治43年3月に卒業後、京都の本山（西本願寺）にて得度入籍した。

当時、本山には、チベット僧(ツァワティトゥル他2名)の留学生が滞在していた。新入りの等観は山深い雪国秋田の出身だから苛酷な自然条件のチベット僧の世話係には適しているだろうと、二人の身のまわりの世話をし、日本語を教えることになった。そのためには彼もチベット語を習得する必要があった。彼は言語能力に秀でていたのだろう、またたく間に僧たちとチベット語で自由に会話するようになった。チベット僧の日本語も上達したが、彼らが学んだ日本語は秋田弁で、京都人には通じなかったという笑えないエピソードも残っている。しかし、等観のチベット語の進歩は著しく、チベット僧が持参していた経典まで読破した。

チベット政府は、17世紀にチベット仏教の高

僧ダライラマを元首として誕生した。しかし、隣国清の被保護国でもあった。その清も当時は、弱体化しており、インドを征服しているイギリスがチベットに手を伸ばしていた。ダライラマの命を受けたチベット僧は、日英同盟の友好関係にある日本の状況視察に来た節もあった。本山の法主大谷光瑞おおたにこうずいは、インドに渡り、仏蹟の発掘調査をした探検家でもあり、中央アジアの民族を支援していた。

明治45年3月、等観はチベット僧たちの帰国時に大谷光瑞から、チベット僧の同行を命じられた。僧たちは、インドに滞在中のダライラマに会うためにインドのダーズリン近くのカリンボンに赴いた。等観は、そこでダライラマに拝謁し、チベット語で会話し、トゥプテン・ゲンツェンという法号を賜った。この法号は、名誉にもダライラマの法号トゥプテン・ギャムツォの一部トゥプテンを授かったものであった。これは、光栄なことで、当時の日本でいえば明治天皇の御名睦仁の睦の字をいただいたことと同じことになる。等観は、ケンボという学堂長の位の僧服まで拝受した。ダライラマは、本国への帰還時、等観に仏教研究のためにチベットへ来ることを強く求めた。翌大正2年には、等観は西本願寺の大谷光瑞からもチベットに赴き、さらに勉強せよとの命を受けた。

チベットはダライラマを元首として独立していたが、イギリスはその政府を認めなかった。当時の日本は、国際的にはすべてに日英同盟が優先しており、英国の進出に従わないチベットには好意的ではなかった。ために日本ではチベット人もチベット語も認識されておらず、東京大学、京都大学にもチベット語を解する人はいなかった。大谷光瑞のように中央アジアに目をつける人は少なかったが、等観は、大谷の命に従い、チベット行きを決意する。しかし、イギリスの植民地インド政府は、インドの正路でのチベット行きを認めない。等観はその目を逃れ、ダーズリンからいったんカルカッタに出て、そこからボクサロードまで汽車に乗り、そこから先は、ある時にはネパール人を装い、ある時はチベット僧に変装して、ブータン国境を越えてチベットの首都ラッサに入った。

等観は、すぐにダライラマに謁見を許され、生活費が支給され、三大学寺の一つセラ学寺への入学が許可され、彼はここで、9年半チベット仏教学を学ぶことになる。チベット仏教というと密教と思われがちだが、多田等観『チベット滞在記』（白水社）や多田明子・山口瑞鳳編『多田等観』（春秋社）の解説によれば、セラ学寺の学科は哲学的でありながらも論理的であって、努力家である等観なら学ぶことが可能であった。しかし、僧院での生活は、文明とは程遠いものであった。第一、チベットには時計がなかった。チベット人は、時間の観念を太陽による実測から得ていた。太陽が西の山の頂を照らす時から一日が始まり、太陽が西の山を照らす場所によって時間を計って行く。洗顔といっても、水が不自由なので、碗一杯きりの水で洗顔する。口に水を含み、口から出した水で手を洗う。二口目

にふくんだ水を手のひらに受けて顔の方をぐるぐる動かして洗顔する。それから全山の五千何百人の僧が全員で読経し、それが終わると小僧によって全員にお茶が配られるが、そのお茶はごくわずかしか飲まず、飲みのかしたお茶に各自が携えてきている“はったい”（※麦・米などを炒って引いた粉のこと。むぎこがし）を入れて団子にする。それが朝食である。それから一日の修業が始まる。

等観は、このような生活をしながら、文字で書かれているけんぎょう顕教のチベット仏教の全てを学んだ他に、ダライラマの特命で、文字に書かれていない密教の部分まで学んだ。ダライラマは等観を寵愛し、大正12年2月の帰国前夜には二人は枕を並べて就寝したと言われる。

帰国時彼は収集した物の他に貰い受けた経典、文献の貴重本24,279点を持参し、東京大学、京都大学、東北大学、龍谷大学、東洋文庫に収納され、研究された。なかでも貴重本はデルゲ版チベットだいぞうきょう大蔵経で、後に等観は東北大学教授陣とともに世界初の『西藏大蔵経総目録』を完成させ、東北大学印度学講座に迎えられた。さらに東京大学、慶応大学などでも指導した。

その後、戦火による文献、資料の散逸を気遣い、弟ぎぞう義蔵が住職をするこうとくじ光徳寺のある花巻に疎開した。戦後、それらは花巻市に寄贈され、現在は「花巻市博物館」に大切に保管され、世界的にも貴重な研究資料として活用されている。

老境に入ると等観も故郷秋田を懐かしみ、昭和42年に76歳で永眠した等観の靈魂は、実家西船寺の墓に眠っているが、その墓の真向いは歌手の東海林太郎の墓である。彼岸では東海林太郎の日本の歌を懐かしんで聴いているかも知れない。